

枝幸町内採集の旧石器・縄文時代石器

夏木 大吾¹

1. 東京大学大学院人文社会系研究科

要旨 本稿では、オホーツクミュージアムえさしに所蔵されている後期旧石器時代～縄文時代に位置づけられる枝幸町内採集の石器について報告した。報告資料の内、型式学的な時期推定が可能な資料は、後期更新世末の後期旧石器時代終末期と縄文時代草創期に位置づけられた。前者は在地の文化で、後者は本州から到来した集団の文化であり、両者は晩氷期前半（15,000～13,500年前頃）に一時期同時併存したと考えらえる。枝幸町内で採集された、右肩上がりの斜行剥離のある柳葉形尖頭器は、縄文時代草創期文化が北海道北部オホーツク海側まで広がっていたことを示す重要な証拠として注目される。

キーワード：枝幸町内採集の石器，後期旧石器時代終末期，縄文時代草創期

はじめに

本稿では枝幸町内の畑地等から採集された資料の中から、後期旧石器時代、縄文時代草創期の文化に関連する資料を報告する。

道内では1980年以後を中心とした開発に伴って、数多くの旧石器時代遺跡が発掘調査された。なかでも、国内最大規模の黒曜石産地に近接する白滝遺跡群では、1995～2008年において約14万m²の発掘で752万点の遺物が出土し、そのほとんどが後期旧石器時代に位置づけられ、その調査研究成果が国内外で注目されている。ここ数十年間の発掘調査成果と研究の蓄積によって、道内の後期旧石器時代の内容や変遷に対する理解は大きく深まってきているが、研究の基礎となる発掘調査が道内全域で行われたわけではなく、まとまった資料に乏しい地域も存在する。宗谷地方は、日本列島北部の先史文化形成をめぐる、サハリンやロシア極東地域との関係を議論するうえで重要

な地域として認識されている。この地域では、旧石器時代遺跡の発掘調査により多くの資料が出土し、かつ内容が公表される事例は猿払村浅茅野遺跡（氏江編2011）のみで、その他の当該時期資料は地表採集資料として得られている例がほとんどであるため、各時期の遺物群としての評価や人類居住・生活の内容までは議論が及ばない状況が続いている。しかしながら、採集された断片的な資料であっても分布論においては重要な情報源であり、同時期の人類文化の広がりを議論するうえで、こうした資料の探索と評価の蓄積は必要不可欠である。

この度、枝幸町教育委員会のご厚意によって枝幸町内出土資料の報告の機会を得たので、その内容を評価し、今後の研究へと結び付けたい。

1. 資料の所蔵と由来

本稿で紹介する資料の実測図を図3～5に示

した。図3-1の尖頭器はすでに公表（役重ほか2011）されている資料であるが、再評価のために再実測し、報告する。

ここで報告する資料は全て枝幸町内から採集された石器で、現在はオホーツクミュージアムえさしに収蔵されている。表1に現在の収蔵番号と採集地等を示した。ゴメ島採集・原田康宏氏採集資料を除く資料は、旧歌登町の歌登ふるさと館展示資料、あるいは旧歌登町内の遺跡で採集されている。これらの資料の多くは旧歌登町によって保管・展示されていたが、2006年に歌登町と枝幸町が合併したことにより、オホーツクミュージアムえさしに移管された。したがって、ここで紹介する資料のほとんどは歌登から得られたものである。図1には枝幸町歌登とゴメ島の位置、図2には歌登において後期旧石器時代、縄文時代資料が採集された地点を示した。

2. 資料の報告

1～3は両面調整の尖頭器で、全て黒曜石製である。1はほぼ完形で、柳葉形を呈し、先端には使用の衝撃によって生じた可能性のある剥離が認められる。それ以外の資料は末端を欠損するが、柳葉形であると推測される。3は被熱により表面の光沢が失われている。全ての資料において、押圧剥離による丁寧な右肩上がりの斜行剥離が観察される。斜行剥離の切り合い関係をみると、左辺側は上から下、右辺側は下から上への連続的な剥離の移動が観察される。技術形態的に縄文時代草創期文化の石器群に含めることができる。

4と5は有茎尖頭器で、完形品である。4は細粒で新鮮な割れ面が灰白色を呈する頁岩、5は黒曜石が用いられている。両方とも身部と基部の区分は認められるが、茎部作出の決りは弱い。4は両面とも全面に加工が及ぶが、5は片面に素材主剥離面を残している。5は剥片あるいは石刃を素材としている。2点とも表面には押圧剥離による丁寧な右肩上がりの斜行剥離が観察される。斜行剥離の切り合い関係をみると、左辺側は下から上、右辺側は上から下への連続的な剥離の移動が観察される。これらの有茎尖頭器は後期旧石器時代の

細石刃石器群の中でも新しい時期の石器群に伴うと考えられる（山原1998；山田2006）。

6は黒曜石製の細石刃核である。細石刃剥離打面と側縁の一部が新しい剥離によって欠損している。大形の石刃が素材とされ、細石刃剥離面のある方の側縁を中心に二次加工が施されている。素材石刃の打面は複剥離打面であり、頭部に擦ったようなつぶし調整が認められる。細石刃剥離作業面は打面側に向かって素材長軸に対し内傾し、そして石刃素材の主剥離面側に傾いている。広郷型細石刃核であり、後期旧石器時代終末期に位置づけられる。

7～12は黒曜石製の細石刃である。7と10は末端部をわずかに欠く。8と9は打点側が残る上部片、11と12は両端を欠く中間部片である。10を除く資料の背面は細石刃剥離面で構成される。10は背面に石核素材面を取り込み、岩屑・角礫の自然面が観察される。打面形状は、7が単剥離打面、8～10は点打面となる。7は打面側から末端部に向かって徐々に窄まり、わずかな湾曲・ねじれがある。10は末端部に向かって末広がりととなる。8、11、12は両側縁が並行している。傾向としては、7は湧別技法（特に札滑型）やホロカ型の細石刃核、8と11、12は広郷型細石刃核から剥離された細石刃によく見られる形態である。全て後期旧石器時代の後半に位置づけられる。

13～16は頁岩製の搔器である。13と14は黄灰色を呈する細粒な頁岩、15は黄褐色に茶褐色の部分が混じる珪化した頁岩、16は黄灰色のやや粗粒な頁岩が用いられている。全て石刃素材であり、その片方の端部あるいは両端に弧状の搔器刃部を有する。14は石刃打面部がわずかに欠け、15は半分程度の残存となるが、他2点は完形である。素材石刃の背面は石刃剥離で生じたと考えられる、一方向への縦長の剥離で構成されている。13は石刃の基部（打面）側に幅狭な搔器刃部、末端側に幅広な搔器刃部があり、両側縁にも二次加工が施されている。14は石刃の末端部に搔器刃部があり、両側縁にも二次加工がある。14の右側縁の二次加工は軽微である。15は石刃基部側に幅狭の搔器刃部があり、両側縁に二次加

工が施されている。16は石刃の末端側に搔器刃部があり、両側縁は石刃素材の縁辺をとどめている。16の石刃打面は厚さ4.5mmの単剥離打面で、石刃頭部には細かな剥離による調整が認められる。これら石刃製搔器はその技術形態から後期旧石器時代後半の細石刃石器群に伴う可能性が高いと考えられるが、石器群を特定するための特徴には乏しい。

17と18は頁岩製の石刃で、両方とも完形である。17は灰色、18は黄灰色を呈する細粒緻密な頁岩である。17は背面に石刃核母形の左側面を取り込む石刃で、末端は石刃剥離作業面端部まで達しておらず、先細りとなる。18は断面三角形の稜付石刃で、背面左半分には石刃核の側面と稜調整に関連する横方向の連続的な剥離が観察される。これら石刃は後期旧石器時代の細石刃石器群に伴うと考えられる。

19はタチカラウシナイ遺跡から出土したとされる両面調整石器である。昭和42年10月に「渡辺之邑氏の畑」から採集されたと記載されている。石材はやや粗粒で、新鮮な剥離面が灰白色を呈する頁岩である。長さが約27cmと大形で、厚みがある。器面に沿うような平坦な剥離が全面に施されている。縁辺にはやや細かな剥離調整もみられるが、全周には及ばず、凹凸の多い縁辺となっている。尖頭器あるいは斧形石器等の未製品の可能性も考慮される。帰属時期は後期旧石器時代の細石刃石器群あるいは縄文時代草創期文化の石器群が候補となるが、具体的な石器群と時期は特定できない。

20はゴメ島から採集された石刃製の搔器である。石材は雲状に赤褐色の部分を含む黒曜石である。石刃末端に搔器刃部があり、両側縁にも連続的な加工がみられる。多段階表面変化が観察され、二次加工の剥離面は石刃素材の面に比べると新鮮である。後期旧石器時代の大型石刃、あるいはそれを素材とする二次加工石器が縄文時代以降に搔器として再加工されたものと考えられる。

3. 遺物の評価

紹介した資料のほとんどは後期旧石器時代に位

置づけられ、特に有茎尖頭器と広郷型細石刃核はその終末期石器群の指標的な遺物である。図5—20の搔器は後期旧石器時代の石刃が後に再利用されたものである。ゴメ島で出土している遺物は続縄文時代～オホーツク文化期が中心であるが、この資料は縄文時代の可能性が指摘されている(川名・高島2010)。

宗谷地域の後期旧石器時代は、浜頓別町山軽台地遺跡(出穂・高倉1998)、猿払村浅茅野遺跡(氏江編2011)、稚内市豊別遺跡群(新岡・佐藤1977)など札滑型・峠下型細石刃核を含む石器群が中心となり、エボト川東岸遺跡(出穂・高倉1998)で小形舟底形石器が知られているのみであった。その後、旧歌登町の資料報告(役重ほか2011)により、幌加型細石刃核や広郷型細石刃核、忍路子型細石刃核の事例が新たに追加された。本稿で紹介した資料には後期旧石器時代終末期の広郷型細石刃核と有茎尖頭器が含まれ、特に後者は宗谷地域で確実な資料としては初めてとなる。広郷型細石刃核と有茎尖頭器は、宗谷海峡を挟み対岸にあるサハリン南部のオリンピア5遺跡、アゴンキ5遺跡で出土している。こうした資料報告の蓄積を経て、後期旧石器時代後半期の空白は徐々に埋まってきている。

今回報告した右肩上がりの斜行剥離がある柳葉形尖頭器は、縄文時代草創期文化に関連する資料であり、宗谷地域では初めて発見となる。同様な例は本州東北部の縄文時代草創期においてよく知られ、隆起線土器を伴うことがある。長井は斜行剥離が北海道では左肩上がり、本州では右肩上がりになることを指摘し、石器の実験製作に基づいてこの差異が石器製作者の動作の違いであることを示し、二つの地域の間には石器づくり伝統の違いがあることを明らかにしている(長井2009)。帯広市大正3遺跡の縄文草創期土器に伴う尖頭器類には、右肩上がりの斜行剥離が観察され、本州集団の北上の証拠と捉えられている。筆者は晩氷期前半(15,000～13,500年前)の縄文時代草創期文化の石器群を大正3石器群と旧白滝5石器群の二つに区分している(夏木2018)が、報告した尖頭器は旧白滝5石器群

に含めることができる。ただし、旧白滝5石器群の柳葉形尖頭器は両側縁に細かな鋸歯状加工が施されることが多く、鋸歯縁のない資料は少ない。報告した資料は鋸歯縁加工のない柳葉形尖頭器である。鋸歯縁加工のない例のみが出土・採集されていることもあるため、それらが時期差あるいは一時期の変異として評価可能なのか今後の検討課題として残されている。いずれにせよ、今回の資料報告により縄文時代草創期文化が道北オホーツク海側の宗谷地域にまで広がっていたことは確かとなった。

4. 縄文時代草創期文化の広がり

現在、縄文草創期の土器を伴う遺跡は、大正3遺跡と遠軽町タチカルシュナイ遺跡 M-I 地点、江別市大麻1遺跡の3例のみとなる。この時期に関連する資料の多くは石器であり、その分布は道内の広い範囲にみられる(図6)。大正3石器群の事例は2遺跡のみで、両遺跡で爪形文土器を伴っている。旧白滝5石器群に関連する遺跡は多いが、資料がまとまって出土することが少なく、土器の伴出例も確認されていない。しかし、北海道の浅埋没環境下では、遺跡が融凍擾乱や重力性擾乱の影響を被り、土器の遺存状況が良くないため、精緻な調査や条件の良い遺跡の調査によって今後確認される可能性はある。

縄文時代草創期文化は北海道において在地の後期旧石器時代終末期文化と併存し(図7)、異系統文化集団の社会が地域を越えず広がっていたと考えられる(山原2008)。後期旧石器時代終末期はそれぞれに文化の存在を想定可能な複数の石器群がある。それぞれ、忍路子型細石刃核(1類・2類)、広郷型細石刃核、小形船底形石器(1類・2類)を指標とし、少なくとも5つには区分される。左肩上がりの斜行剥離を有する有茎尖頭器は、これら石器群の全てで確認される。後期旧石器時代終末期の中での石器群の変遷は、年代的証拠が乏しいため不明瞭である。宗谷地域において後期旧石器時代終末期の石器群の多くが確認されるため、この地域でも晩氷期前半において異系統文化が併存していた可能性が高い。ただし、道

内を広く見渡しても、縄文時代草創期文化の遺跡は少なく、その規模は小さいことが多い。したがって、縄文時代草創期文化は後期旧石器時代終末期文化に対して少数派の文化であったと考えられる。

異系統文化の集団間での関係性を示唆する証拠が旧白滝5石器群において見つかっている。一般的に縄文時代草創期文化の斜行剥離は右肩上がりとなるが、道東オホーツク海側では後期旧石器時代終末期石器群と同様な左肩上がりの例が認められる。また、遠軽町旧白滝5遺跡では、石器の素材生産に後期旧石器時代終末期に類似する石刃生産技術が用いられている。こうした証拠から異系統文化集団間では社会的接触があったと推測される。縄文草創期の石器群では、最初から広い範囲の石器石材が利用されていることから、資源獲得などに関連して両文化集団間で一定の情報ネットワークが成立していた可能性はある。

晩氷期前半が過ぎると、江別市大麻1遺跡の室谷下層式土器を除いて、縄文時代草創期文化の証拠がみられなくなる(図7)。室谷下層式は更新世と完新世の境頃に位置づけられるため、晩氷期後半に大きな空白が生じる。この空白期間はヤングドリラスの急激な寒冷化の時期に重複する。このことから、縄文文化の途絶も想定されている(山原2008)。北海道全体で土器の安定的利用が開始するのは、完新世に入り縄文時代早期初頭になってからであり、この時期には異系統文化併存はみられなくなる。

おわりに

本稿では枝幸町内から採集された石器を紹介し、後期旧石器時代終末期と縄文時代草創期の資料が含まれていることを報告した。それらはおおむね晩氷期直前から晩氷期期間に位置づけられる。この期間には北海道とサハリン、千島列島南部はロシアのアムール下流域と陸続きで、一つの半島を形成していた。類似する後期旧石器時代終末期の資料はサハリン南部でも出土しており、北海道産黒曜石の利用が明らかにされている(出穂・ファーガソン2016)。同石器群に関わる文化の

北への広がり、人や物の移動を考えるために、道北宗谷地域の資料をさらに蓄積していく必要があるだろう。また、縄文時代草創期文化の資料が宗谷地域でも見つかったことで、さらに北側の地域に広がる可能性も浮かび上がってきた。未だその北限は見定められておらず、今後の検討課題である。

引用文献

- 出穂雅実, ジェフリー, ファーガソン. “黒曜石の体系的産地分析からわかってきた古サハリン—北海道—千島半島の後期旧石器時代における狩猟採集民行動の変化”. 晩氷期の人類社会. 六一書房, 2016, pp. 129-145.
- 出穂雅実, 高倉純. “頓別平野および宗谷丘陵における細石刃石器群”. 北海道旧石器文化研究 3. 1998, pp. 29-38.
- 氏江敏文. “浅茅野遺跡資料報告集”. 道北文化研究 15. 名寄郷土史研究会, 2011.
- 川名広文, 高島孝宗. “音標ゴメ島遺跡分布調査報告”. 枝幸研究 2. オホーツクミュージアムえさし, 2010, pp. 46-62.
- 長井謙治. 石器づくりの考古学—実験考古学と縄文時代のはじまり—. 同成社, 2009.
- 夏木大吾. “北海道における縄文時代草創期文化”. 論集忍路子 V. 2018, pp. 59-77.
- 新岡武彦, 佐藤和利. “稚内市豊別遺跡群予報”. 北海道考古学 13. 1977, pp. 91-94.
- 役重みゆき, 山田哲, 佐藤宏之, 高島孝宗. “宗谷地方における後期旧石器時代石器群—旧歌登町表採資料の紹介—. 環日本海北部地域における後期更新世の環境変動と人間の相互作用に関する総合的研究. 東京大学常呂実習施設研究報告 8. 2011, pp. 193-218.
- 山田哲. 北海道における細石刃石器群の研究. 六一書房, 2006.
- 山原俊朗. “北海道における旧石器時代終末期の覚書”. 北海道考古学 42. 1998, pp. 117-122.
- 山原俊朗. “更新世末期の北海道と完新世初頭の北海道東部”. 縄文化の構造変動. 六一書房, 2008, pp. 33-52.

表1 報告資料一覧

図版番号	収蔵番号	採集地	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
図3	1 OME05-101-46	旧歌登町教育委員会 パンケナイ1	尖頭器	黒曜石	5.91	2.2	0.59	5.8
図3	2 OME05-101-181	旧歌登町教育委員会 枝幸町内	尖頭器	黒曜石	5.72	2.03	0.56	6.4
図3	3 OME05-2005-40	原田康宏資料No.82 枝幸町内	尖頭器	黒曜石	5.66	1.86	0.44	4.9
図3	4 OME05-101-149	旧歌登町教育委員会 マチカラウシナイ遺跡	有茎尖頭器	頁岩	14.89	4.42	1.03	61.75
図3	5 OME05-101-179	旧歌登町教育委員会 枝幸町内	有茎尖頭器	黒曜石	8.91	33.4	0.88	24.6
図3	6 OME16-041	東歌登	広型細石刃核	黒曜石	10.06	5.02	1.65	94.9
図3	7 OME2005-40	原田康宏資料No.62 枝幸町内	細石刃	黒曜石	4.85	0.97	0.19	1.1
図3	8 OME05-101-187	旧歌登町教育委員会 枝幸町内	細石刃	黒曜石	2.56	0.49	0.19	0.3
図3	9 OME05-101-186	旧歌登町教育委員会 枝幸町内	細石刃	黒曜石	1.91	0.7	0.15	0.3
図3	10 OME05-101-190	旧歌登町教育委員会 枝幸町内	細石刃	黒曜石	2.78	0.84	0.31	0.5
図3	11 OME05-101-189	旧歌登町教育委員会 枝幸町内	細石刃	黒曜石	3.91	0.74	0.25	1
図3	12 OME05-101-188	旧歌登町教育委員会 枝幸町内	細石刃	黒曜石	2.95	0.56	0.14	0.3
図4	13 OME05-101-176	旧歌登町教育委員会 枝幸町内	搔器	頁岩	12.61	3.62	1.34	62.5
図4	14 OME05-101-177	旧歌登町教育委員会 枝幸町内	搔器	頁岩	11.14	3.64	1.3	46.6
図4	15 OME05-101-167	旧歌登町教育委員会 パンケナイ1	搔器	頁岩	8.4	3.97	0.84	29.2
図4	16 OME05-101-164	旧歌登町教育委員会 パンケナイ1	搔器	頁岩	8.41	3.99	0.98	39.7
図4	17 OME05-101-166	旧歌登町教育委員会 パンケナイ田辺谷栄太郎畑	石刃	頁岩	10.31	2.97	0.91	24.9
図4	18 OME05-101-158	旧歌登町教育委員会 18線遺跡	石刃	頁岩	12.23	3.92	2.06	79.4
図5	19 OME05-101-148	マチカラウシナイ遺跡	両面調整石器	頁岩	26.8	10.01	5.24	95.0
図5	20 コメ07-47	コメ島	搔器	黒曜石	6.37	4.38	1.32	58.7

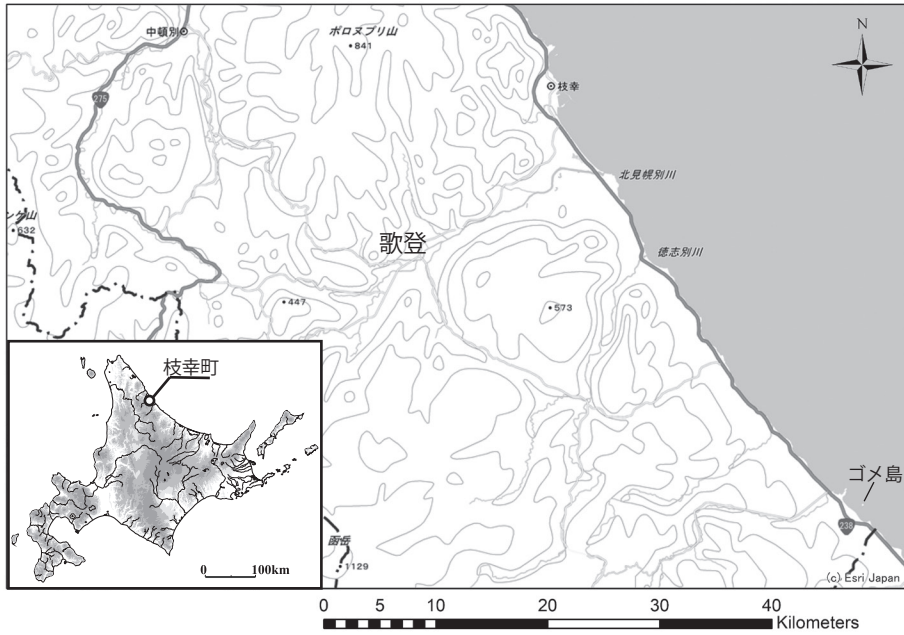


図 1. 歌登・ゴメ島の位置

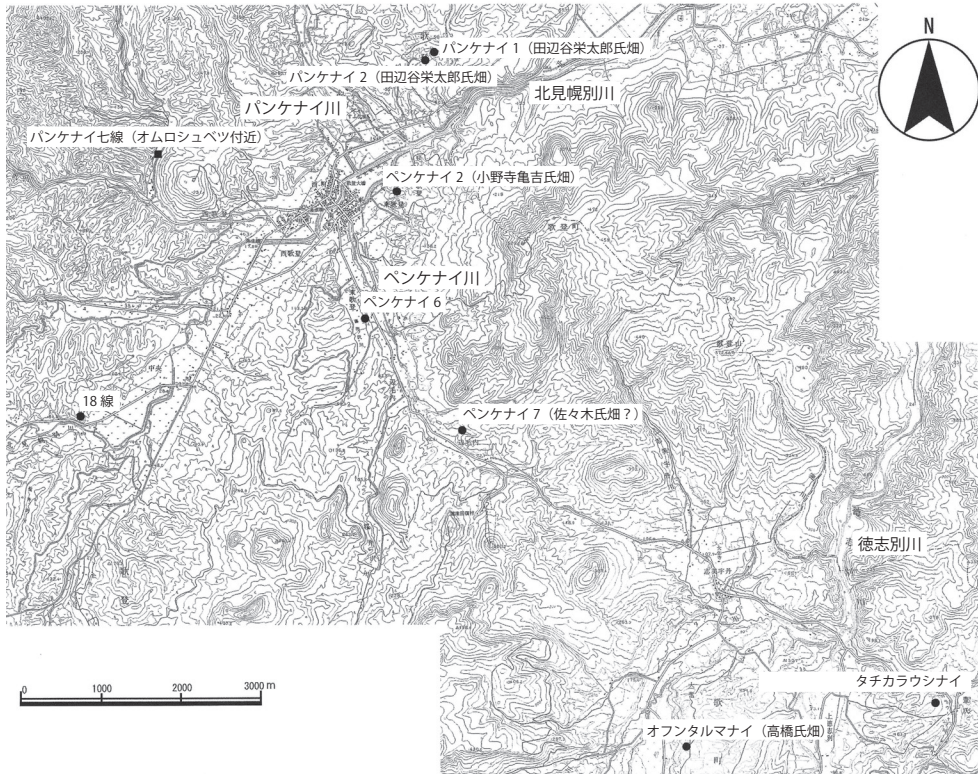


図 2. 歌登の後期旧石器時代・縄文時代草創期遺跡

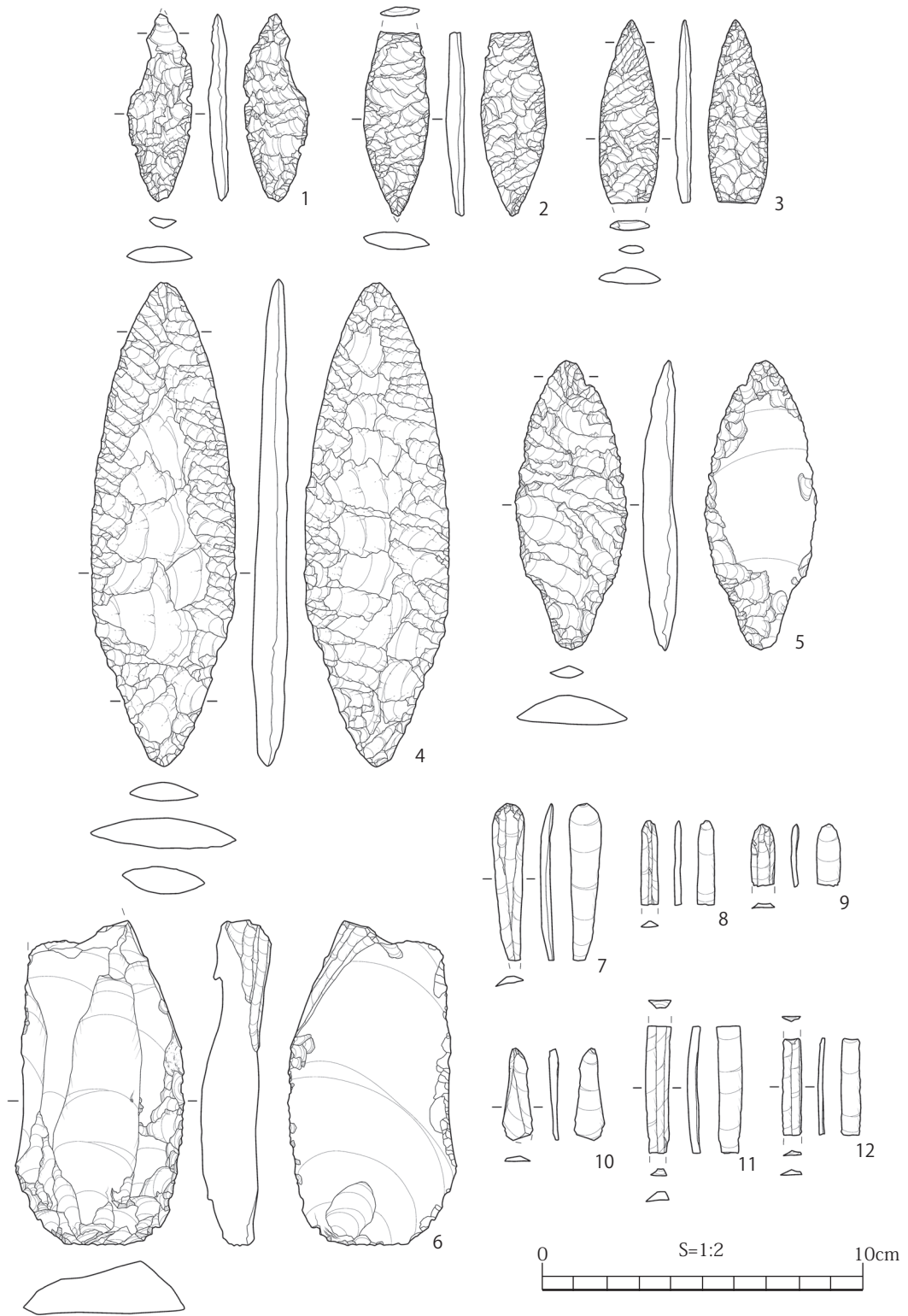


図 3. 枝幸町内出土の石器 1

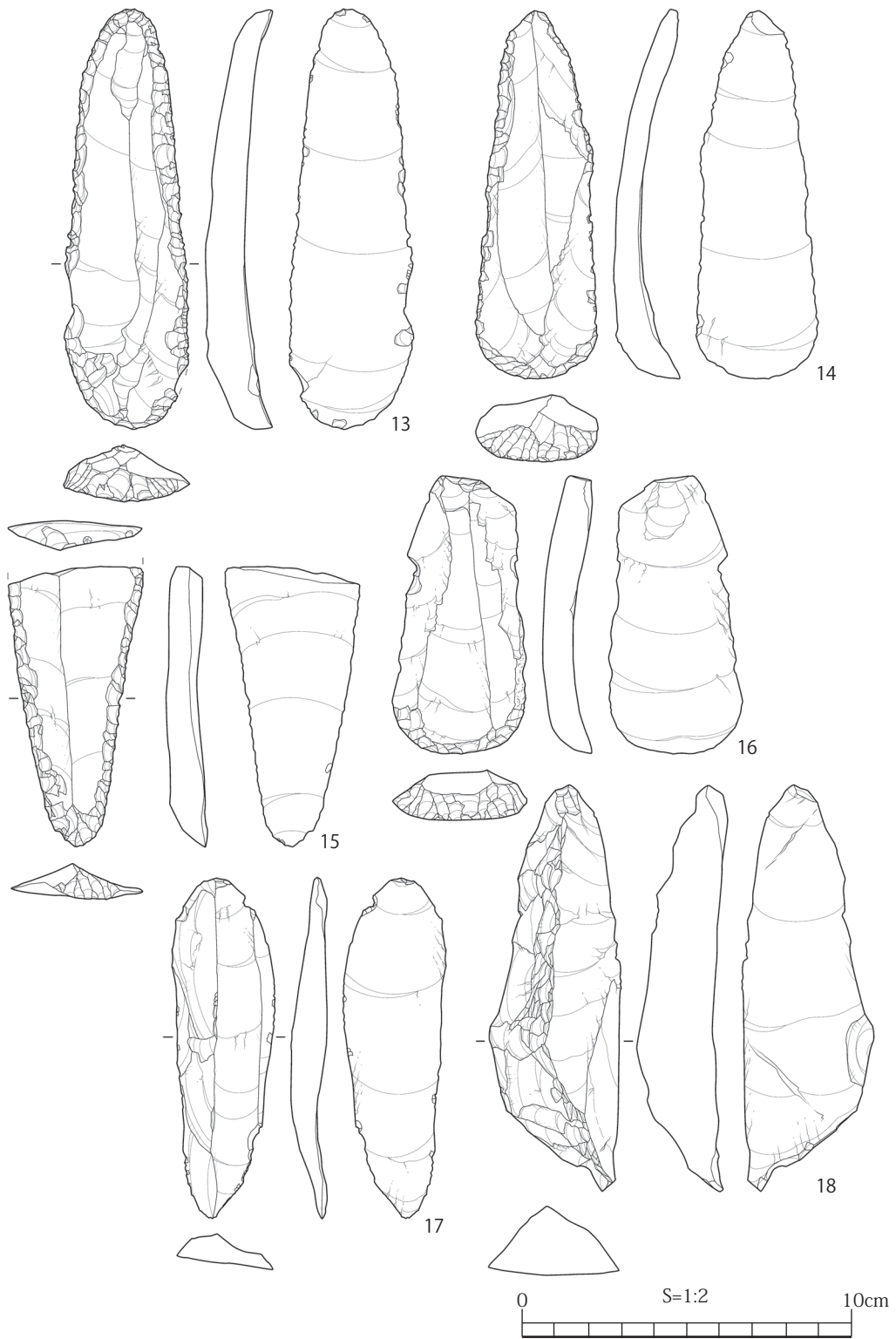


図 4. 枝幸町内出土の石器 2

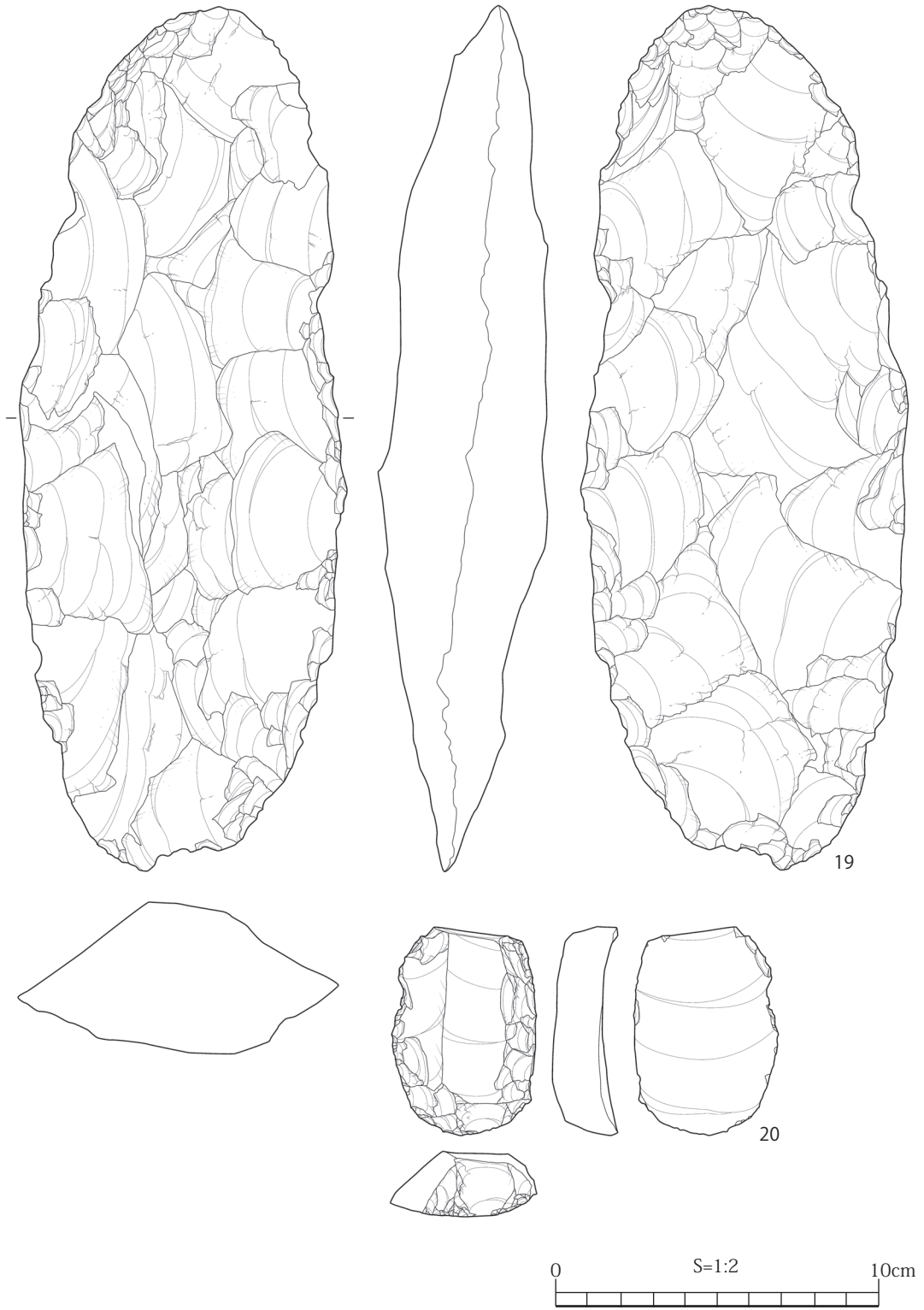


図 5. 枝幸町内出土の石器 3

大正 3 石器群

- 1: 大正 3
- 2: タチカルシュナイ Loc.M-I

旧白滝 5 石器群

- 3: パンケナイ 1 ほか
- 4: モサンル
- 5: 滝上公園
- 6: 雄鎮内
- 7: 遠軽家庭学校
- 8: 上白滝 2
- 9: 奥白滝 1
- 10: 上白滝 8
- 11: 白滝 18
- 12: 旧白滝 5
- 13: ホロカ沢 1
- 14: トコロチャシ跡
- 15: 美里洞窟
- 16: 北進
- 17: 川東 3
- 18: 北上 2
- 19: 端野町協和 (分布なし)
- 20: 網走市 (分布なし)
- 21: ピラオツマッコウマナイチャシ
- 22: みどり 1
- 23: オクシベツ 4
- 24: 東釧路貝塚
- 25: 大正 6
- 26: 西舎 3
- 27: 七丁目沢 2
- 28: キウス 5
- 29: キウス 11
- 30: キウス 7
- 31: キウス 4
- 32: キウス 9
- 33: 厚真 3

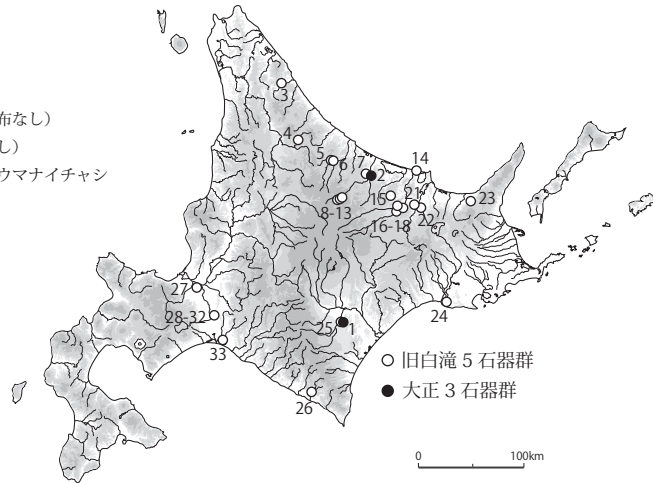


図 6. 縄文時代草創期の石器群分布

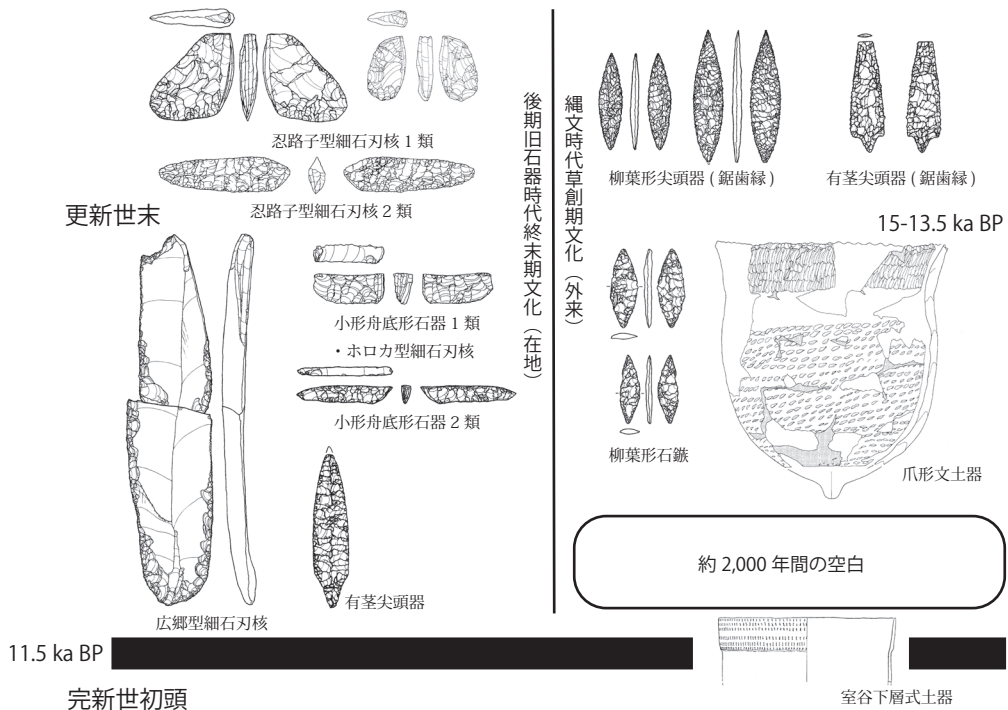


図 7. 北海道における更新世末の二つの文化